

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第44号

発行日 2016年7月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 2016年度 差別の歴史を考える連続講座Ⅱ

第1回 10月7日（金） 洛北岩倉と精神医療

講師：中村 治さん  
（大阪府立大学人間社会学部教授）

第2回 10月21日（金） 近世・近代の京都の清掃の仕事

講師：山崎 達雄さん  
（ごみ文化歴史研究会・日本下水文化研究会会員）

第3回 11月11日（金） 1928年、昭和天皇の京都での

即位の「大典」と朝鮮人  
—朝鮮人土木労働者の利用と排除を中心として—

講師：塚崎 昌之さん  
（佛教大学・大阪大谷大学非常勤講師）

\* \* \* \* \*

時 間 午後6時30分～8時30分

場 所 京都府部落解放センター3階 第2会議室

参加費 無料

～参加希望の方は前日までに電話・FAX・電子メールでご連絡ください～

当資料センター主催の「二〇一六年度差別の歴史を考える連続講座」を京都府部落解放センターで六月一七日、七月一日、一五日の三回にわたり開催しました。

各回の講演要旨は次の通りです。尚、詳しくは年度末に発行予定の講演録をご参照ください。

第1回

四条河原の「芝居地」

— 鴨川の治水と民衆の娯楽 —

講師 下坂守さん  
(日本中世史研究者)

鴨川四条の河原は、中世から近世にかけてその範囲が変遷している。その東岸・西岸の境界線は、平安京の造営に伴って洪水から都を守るために造られた西岸の「堤」、鎌倉時代、創建された建仁寺を洪水から守るために造られた東岸南側の「大和大路」、天正十九年にかつての西岸の堤のあとに造られた、秀吉の都市改造による「御土居」、その数年後に東岸の「大和大路」の北に造られた「縄手堤」、慶長七年、江戸幕府の都市改造による「御土居の破壊」、慶長十六年の「高瀬川」の開削、寛文十年に構築された東西両岸の「寛文新堤」などによって変化していくの

である。そしてそれによって、芝居や見世物、曲芸などが行われていた芝居地も移っていく。

河原の領有権については、中世には祇園社が現在の河原町通以東を橋や河原を含めて領有していたが、大永六年、室町幕府によって建仁寺に領有権が移り、建仁寺が河原の田畑を領有することになる。その後、高瀬川の開削や寛文新堤の構築にもなって江戸幕府へと移り、芝居小屋などが建っていた場所も御蔵入―幕府の直轄地となるのである。

江戸時代になり世の中が落ち着く中で、十七世紀半ば以降、山林の乱開発が進み、畿内で大洪水が相次ぐようになる。そのため幕府は「山川掟」という法令を出して本格的な治水対策を始めている。その鴨川についての具体的な治水対策として造られたのが「寛文新堤」である。幕府は祇園社や建仁寺からとりあげた河原に新堤を造り、そこを新地として新しく開発し芝居地と茶屋街を置いた。これは堤が破れたときに被害が最小限にすむように、そこに住まわせることによって治水の一環としたということができる。

これらの四条河原の変遷について

て様々な洛中洛外図屏風などの絵図史料や僧侶の日記や町触などの文書史料を使いながら、詳しく説明された

第2回

犬追物と河原者の活躍

講師 源城政好さん  
(立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員)

犬追物は、柵で囲まれた馬場に犬を放ち騎乗の武士が先のとがっていない矢で犬を射る武芸鍛錬の競技で、鎌倉時代に始まったといわれる。

現存する洛中洛外図の中で最古の「洛中洛外図屏風歴博甲本」には、まさに騎馬武者が逃げ惑う犬を射る瞬間が描かれており、周辺の神社や川の流れから歴博甲本に描かれている犬馬場は、高野川の東畔にあったことがわかる。また、この場面に描かれている柵の左隅の犬を連れた人物と中心部にいる人物が河原者だといわれている。

『貞丈雑記』や『蔭涼軒日録』などの史料によると、馬場は七五×七二m位の広さで専用に造られ、犬一五〇匹を一〇匹づつ放ち一五回に分けて行われた。その犬を扱ったのが、被差別の民である河原者であった。河原者の役割は三つあ

り、犬の調達、馬場における犬の管理と競技の進行、競技終了後の犬の処置であった。

犬追物には多数の犬の調達が必要であり、野犬狩りによって集められた。「上杉本洛中洛外図屏風」には野犬と捕獲人の緊張関係を活写した「犬狩」の場面がある。都市の日常生活を描く洛中洛外図に描かれたということは、野犬狩りは都市での日常的風景だったといえる。

犬追物当日は、犬一匹に一人の河原者が付き「犬引役」をつとめた。また、馬場の中央で犬の首縄を切って放す「犬放役」も河原者が勤めた。そして、競技が終わるたびに興奮した犬を素早く取り押さえ、血などで汚れた馬場を掃除し、競技終了後には死んだり傷ついた犬を処置するのも河原者の仕事であった。これらの仕事は、熟練した技量が必要とされる仕事であり、河原者による卓越した犬の誘導があつてこそその犬追物だったのである。

応仁の乱以降、合戦の戦闘法の変化に伴い、歩兵集団に比重をおいた合戦が主流になるにつれて犬追物は次第に衰退していくことになる。

## 第3回

## 近世京都の産科医学に見る

## 医療とジェンダー

賀川流産科は女性に何をもちたらしめたのか

講師 鈴木則子さん

(奈良女子大学生活環境学部教授)

江戸時代、出産は産婆が中心に執り行い、医師は殆ど関与しなかった。母体内で胎児が死んだ場合は堕胎薬（水銀など）を使ったり、産婆が押し出して処置をしたが大変危険であり死亡率も高かった。一八世紀半ば、京都において初めて産科医療として「賀川流産科」が登場する。初代の賀川玄悦は、母体を守るために死んだ胎児を鉄製の鉤を使って取り出す「回生術」や鉤を使って胎盤を引き出す鉤胞術を考案し、塾を開き秘伝として伝えていった。これらの術は、現在のような機器や抗生物質がない中、子宮が見えない状況で産道を傷つけることなく手術をする高い技術が必要であった。これまで医学史研究の分野では、この賀川流産科は医療技術面で高い評価がなされてきた。しかし、一九八〇年代のジェンダー研究の中では、妊婦・産婆・家族といった女性のネットワークで行われていた出産から女性たちが排除され、現代に続く出産の医療化のスタートが賀川流

産科であり、権威を持つ男性産科医と妊婦というジェンダー的立場をつくった源流とされた。出産史を医学技術史から女性史研究のレベルに変えていったという面では評価できるが、医学史、医学技術などについての理解が浅く、実証性に欠けるものであった。

医療技術史研究の側面と共にこれらの女性史研究として取り上げようとした姿勢を受け継ぎながら実際に臨床現場で賀川流産科が女性たちに何をもちたらしめたのかを医学史料に基づいて明らかにするために、岡山の在村医中島友玄が残した三七年間（二七四件）の回生術の記録である『回生鉤胞代臆』をとりあげられた。この臨床記録を元にして賀川流の医学書を読み説き、そこからわかることは、医療技術への誇りや患者への責任感といった医師の「専門職意識の醸成」であり、また、それまでの医者と患者の関係を変える「女性患者への配慮」や「女性施術者」「女性産科医」の登場であった。また回生術自体も、胎児も母体も傷つけることなく取り出す技術を高めていったのである。

今後、医療の中の女性を考えていく上でこうした具体的な考察が重要なプロセスになるのではな

いかとまとめられた。  
(文責 編集部)

## 本の紹介

## 今村家文書研究会編

## 『今村家文書史料集』

## 上巻 中世く近世編・下巻 近代編』

藤田 励夫

(文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官)

本書は、今村家文書研究会編によるもので、監修を川嶋將生氏、全体編集を木下光生氏が担当し、このほか重光豊、河内将芳、大場修、秋元せき、小林ひろみ、左右田昌幸、小林丈広、本郷浩二の各氏が分担執筆し、泉亭理氏がトレーヌ図を担当している。執筆者は、中世から近代に至る、都市史、部落史、建築史等の広範囲にわたる研究者から成っている。

本書の内容は、戦国期以来、京都近郊の伏見街道沿いで地域の有力者として代々続いてきた、今村家（現・京都市東山区本町十丁目）に伝えられた文書群に関する史料を集めたものである。今村家初代慶満は、戦国時代に京都へ入った三好長慶の被官であった。慶満のあと、今村家は長男・政次と次男・忠右衛門の二系統に大きく分かれる。政次家は、のちに妙法院の院

家日徹院の家司となっていく。忠右衛門家は、代々、山城国愛宕郡柳原庄の庄屋や本町十丁目の年寄、そして明治初年の添年寄・中年寄や区長などを務めるようになった。本文書群は、忠右衛門家に伝来したものである。

今村家文書は、享祿四年（一五三二）から昭和二十二年（一九四七）の約四百年にわたる、総点数約六七〇〇点を超える史料群である。本書は、これらの大部分な文書群から主要な文書を選び出し、章・節ごとに分類して翻刻すると共に、それらに解題を付している。各章立ては、後掲の通りである。また、文書群の全体像については、附録のCD（上下巻共に同内容のCDが附けられている）に収められた文書目録によって概要を知ることができ。さらに、本文書群の特徴の一つとして、豊富な絵図類

が含まれていることあげられるが、このうち主要な絵図三十点については、画像がCDに収められている。これらの絵図については、トレース図もCDに収められているので、絵図と併せ見ることにより理解を大幅に助けられる。文書の内容については、各章ごとに紹介していくことにする。

## 上巻

総説 今村家文書について

第一章 戦国・近世前期の今村家

第二章 今村家の由緒と経営

第三章 幕末の加茂川筋改造と柳原庄

第四章 賤民集落と非人小屋

## 下巻

解題 近代の柳原庄と今村家

### 第一章

本町通と柳原庄の近代

第二章

今村家の人事

第三章 明治維新期の日記類

附録C D

今村家文書目録  
今村家文書絵図(原図) 三十枚  
今村家文書絵図(トレース図) 三十枚

上巻では、まず、総説において、

一九九七年十一月二十六日における、執筆者の一人である重光氏と今村家御当主今村壽子氏のふとした出会いに始まる文書発見から、調査の経緯、本書刊行までの約十年に及ぶ間の出来事が、簡潔にはあるが臨場感をもって語られている。とりわけ、本書刊行への今村家御当主の強い思いと、それに応じた研究会会員の熱意が伝わってくる。

文書調査には、本書執筆者以外にも様々な人々が関わり、膨大な作業量となった調査や研究会を積み重ね、本書に先駆けて、すでに①「中世区分」、②「近世Ⅰ区分」、③「近世Ⅱ区分」、④「近代区分」に分かれた四冊の調査・研究報告書も刊行されている。その後、今村家の伝承や祭事、および住宅の調査を実施したことに関わって、新たな文書が二回にわたって追加で発見された。新出文書も含めた全ての文書の整理・目録作成作業が完了したのは二〇一三年九月であり、ここに本書刊行へと踏み出す準備が整った。

第一章では、戦国期から近世前期、およそ十六世紀から十七世紀までの文書や帳簿類がおさめられている。第一節には年月日の明記された文書や帳簿類を編年でお

さめている。そのうち年紀のある最古の文書は、享祿四年八月十日付け七条河原橋預状であり、最新のもの天和二年(一六八二)六月九日付け柳原村知恩院領川原高寛である。第二節には、年末詳の文書や帳簿類を月毎にならべている。今村家が根ざした地域は、中世の段階では「法性寺柳原」と呼ばれたが、豊臣秀吉の大仏造立を経て「大仏門前柳原」、「大仏廻柳原」へとその名が変化した。文書の内容も、大仏造立を境にして、戦国期までの書状類から、算用状などの帳簿類へと変化が認められている。また、解題では、とりわけ注目されることとして、今村慶満が「今村同名中」の一員であったこと、今村政次が慶満の長男であったことが明らかになった点をあげている。

第二章では、今村家という「家」を理解するために、同家の由緒や経営に関する史料が掲載されている。第一節は由緒に関わる史料からなる。特に、節冒頭にかかげられた「今村家系図」の典拠となつた延享四年(一七四七)五月付けの今村氏系図や、元禄五年(二六九二)二月に京都町奉行所の命で開始された帯刀人改めを契機として作成されたと考えられる、同年七月付

け今村兵庫郷侍帯刀由緒書は、今村家由緒に関わる根本史料といえる。ほかに、妙法院日嚴院の家来となつた忠右衛門家四代、および五代に関わる史料がある。また、泉涌寺との関係では、慶満の三男明常(明詔)が泉涌寺来迎院の住職であったことが判明した。その後、幕末に修陵事業をめぐって泉涌寺に急接近していくことに関わる史料もまとまっている。

第二節は、元治元年(一八六四)の農作方日記と明治七年(一八七四)の手元控帳(金銭出納簿)を掲載する。これらから、かならずしも経営実態の全体像がよく分かるとはいえない今村家における、水藍を初めとする多彩な農作物の栽培・販売の実態を知ることができる。

第三節は、今村家住宅の建造物調査に基づいた解題が詳しく、普請願書と願書にある絵図を図版で紹介し、十八世紀中期に遡る京都の希少な町家遺構と評価している。今村家住宅は、本文書が保管されてきた場であり、詳しい考察が加えられていることは、文書群理解にとっても大きな意義が認められる。

第四節では、御当主壽子氏からの聞き取りをまとめている。文書史料集では珍しい内容である。家

の年中行事や本町通りの変容に加えて、特に文書の伝来については、母から教えられたこととして、次のとおりある。「古文書にも思いつきがあります。「(今村家は)庄屋をしていながらその時の文書が中二階の長持ちに一杯ある。それは『家の宝』である」と子ども時代にも母から教わっていました。私とはときどき、暗い二階で古文書を母から見せてもらったことを覚えています。」この記述に加えて文書箱の蓋を開けたところと、その設置場所の画像も掲載されている。これらは、古文書が今、現在にいかにして伝えられたかをイメージできる貴重な試みといえよう。

第三章は、安政三年(一八五六)以後、加茂川筋の御深い御普請をきつかけとする堤や用水の普請、あるいは水車の取り建てといった、加茂川筋の改造に関する史料がまとめられている。

第四章では、柳原庄に隣接して存在していた賤民集落(穢多、かわた村)のうち銭座跡村および銭座跡村出村と大西組、そして七条裏の非人小屋に関する史料を四節に分けて紹介している。

第一節で史料を紹介する銭座跡村は高瀬川東岸、八条通以北に所在し、享保十七年(一七三二)に柳

原庄之内元銭座屋敷跡荒地七千坪余が穢多居小屋地として天部・六条村年寄りへ下されて成立したものである。この地は、元禄十三年から寛永通宝の鑄造がはじめられた地で、宝永六年(一七〇九)に宝永通宝の鑄造を止めてからは、銅気が多く耕作ができないため、ながらく放置されていた。

享保二十年の絵図もあり、天部村と六条村の境が朱線で表され、前者が北側、後者が南側であったこと等を知りうる。また、明治十三年に戸長役場へ提出された「柳原庄元銭座跡一件之写」は、開発の経緯を知りうる史料として貴重である。

第二節では、今村家文書の賤民集落関係でもっとも数が豊富な銭座跡村出村関係の史料を紹介する。銭座跡村の東方向に進出したのが出村である。本史料によると、東方向への進出は、『柳原町史』による天保七年(一八三六)より早く、文政九年(一八二六)二月から土地の買得が始まっていたことが知られる。

史料の内容は、年貢の高関係、土地所有の移動や家作・居小屋の建添関係が大半である。出村のもつとも東側に形成された革干場についても、十数点の史料があり、

「干場庵絵図面」では地割りの状況まで知ることができ、また、牛角の売買や牛肉渡世に関する史料もまとまっている。

第三節では、大西組(小稲荷)を取り上げている。大西組の開発は、文化十一年(一八一四)より六条村の革干場として天部村から借用していた「天部村領字小稲荷と申畑地」に、天保十四年に六条村より建家の願いが出されたことに始まるという。この地は、東側に川を挟んで隣接する六条村とともに安永四年(一七七五)の「大仏柳原庄田畑際目之図」には、地目・土地割が記載されていない地区であり、支配関係が相違していることがその理由と考えられている。六条村の絵図は正徳三年(一七二三)のものを始め、明治四年・六年のものがある。

第四節では、加茂川に架かる七条橋西詰めの松明殿の南側にあった「非人小屋」の史料を掲載する。この「非人小屋」に関して、小屋頭による同地の「御除地并拝借地」の相続についての文書等がある。また、元治二年の七条裏非人小屋絵図もあり、住宅の配置等を知ることができ、

下巻には、慶応四年(一八六八)から明治二十年代までの史料が掲

載されている。上述のとおり史料は三章に分けられているが、「解題 近代の柳原庄と今村家」は巻頭にまとめられていて、その内容は史料の章立てに沿っている訳ではない。このことにより、上巻とは体裁が異なり、解題によって史料の概要を理解するという点では、やや分かりづらくなっている点はやや否めない。しかし、「第三章 明治維新期の日記類」が史料の大半を占めていることから推測されるように、史料の形状によって配列の制約を受ける翻刻と、内容による解題が必ずしも一致した構成にならなかったということである。

今村家が居住する本町十丁目は大仏組に所属する洛中の町であったが、明治元年の町組改正で下京三十八番組に所属し、同二年一月には、第二次町組改正で下京三十一番組に編入された。今村家当主忠右衛門は、本町十丁目の議事者であったが、明治二年に退任して町組の代表・中年寄の補佐役である添年寄に就任し、翌三年には中年寄となった。さらに、家督を長男に譲って忠次(忠治)と名乗るようになった後、明治五年には愛宕郡第六区の区長に就任する。さらに、翌六年には、愛宕郡内の区

改編に伴い、南は今熊野村や柳原庄から北は一乗寺村や修学院村を含む鴨川東岸一帯が愛宕郡第一区に編成され、忠右衛門はその副区長となった。このあたりのことは、「第二章 今村家の人事」に史料がまとめられている。

今村家は柳原庄の庄屋を務める家柄であり、忠次は、明治五年の戸長制度導入まで庄屋であった。忠次は戸長とはならなかったが、これは愛宕郡第六区の区長に任じられたため、辞退したものと推測されている。

明治四年八月には、いわゆる「解放令」が出され、これにより六条村、銭座跡村、大西組、水車などの被差別民の集落が柳原庄に組み込まれた。忠次によって明治四年十一月から記録された「領用手元雑留記」等は、被差別民を受け入れる側がその実務の過程を記した貴重なものとして評価されている。

明治四年の「解放令」により、被差別民集落も含めた近代柳原庄が形成された。同二十二年に市制が施行されるが、柳原庄は市域に編入されず、町制を施行して柳原町となり、桜田儀兵衛が初代町長に就任した。その後、大正七年（一九一八）に柳原町は京都市に編入さ

れる。鴨川以東の三字は、以西の崇仁学区とは別の一橋学区に組み込まれ、鴨川両岸に広がっていた柳原庄以来の結びつきがここで断ち切られることになった。

第一章には、桜田儀兵衛による「地勢概記写」や小学校建営、元銭座村平民藉編入、元銭座村内を横切る鉄道敷設、鴨川筋堤防等に關わる史料がおさめられている。また、上巻の解題に触れられた牛肉関係の史料として、明治四年十月より翌五年二月まで牛肉煮売渡世を願ひ出たものがあり、京都における食肉としての牛肉の早い事例として注目される。

第二章は前述のとおりである。第三章は、下巻全三百五十頁のうち、二百五十頁以上を占めている。なかでも、明治四年十一月から記録された、前述の「領用手元雑留記」をはじめとする、「領内勤用手元日記」、「役取扱雑事留手元記」、「役用雑日記」は明治五年六月まで続いている。これらは柳原庄の庄屋今村忠次による記録であり、本章の大部分にあたる。「解放令」直後の柳原庄を理解するための基礎史料である。

本史料集は、文書所有者である今村家御当主と調査研究に關わった方々の熱意の結晶といえるもの

である。これまで内容の知られなかつた今村家文書を一から調査し、その要点をまとめ、全貌を知りうる目録を附して刊行したことの意義は大きい。文書だけでなく、建造物調査や所有者への聞き取りも加えられている点が、本史料集にいつそうの重みを加えている。今村家文書は、戦国期から昭和に至るながい期間の地域の歴史を研究する上での豊富な内容を伝えており、なかでも賤民集落に關わる史料がまとまっていることや、豊富な絵図類、公私にわたる諸事留帳や日誌類の存在に大きな特色がある。解題にも「出版物に掲載する史料の取捨選択でどれだけ「涙を呑むか」という判断にもかなりの議論を要したからである。」と述べられているように、本史料集に採択されなかつた貴重な史料がまだまだ存在しており、今後の研究の深まりが期待されるところである。

さらに欲を言わせていただければ、附録の目録に法量、紙数や「一紙」とした場合の堅紙か切紙かといった形状、楮紙、罫紙といった料紙についての古文書のモノとしての情報も入れていただくと、各文書についてもっとイメージしやすいものとなつたと思われる。

同じく「堅帳」であっても、一〇紙程度の薄い冊子なのか、一〇〇紙を超える大部なものなのかで、史料に対するイメージが異なってくる。また、備考欄には「仮綴」や「包紙」、「袋」、「こより」等によって一括された関係が明示されていて、各文書の関連性がより分かり易いが、解題にも示されているように、三回にわたって「発見」された古文書が、それぞれに於けるのが、読者に分かるよう明示されていない点は残念である。つまり、本文書は、本史料集刊行にいたる調査が着手されるまで、他に調査の手が入っていないかたどみられているので、伝来の状態がより重要性をもっていと考えられるからである。できれば、附録のCDに、古文書の発見時の収納状況や中世文書等の画像を納めていただいていると、より理解が深まつたと考えられる。

最後に、大部な古文書を地道に調査し、その成果を史料集にまで結実させた関係者の皆様に敬意を表すと共に、今村家文書がこれからも安全に伝えられていくことを祈って結びとしたい。

（思文閣出版刊、各B5版、二〇一五年一月、上巻八、八〇〇円、下巻九、二〇〇円）

もの 9 近年の部落差別事象の収集から見えてくる問題  
点 内田龍史・棚田洋平・齋藤直子・妻木進吾  
調査結果からみる部落問題のいま 2 教職員の意識に映  
る人権教育の課題 棚田洋平  
走りながら考える 176 全国水平社創立100年を展望する  
4 実態調査の実施と原因究明・方針立案を 北口末広  
**ヒューマンライツ 338** (部落解放・人権研究所刊, 20  
16.5) : 540円  
特集 公式確認60年—水俣病と差別  
調査結果からみる部落問題のいま 3 土地差別の実態が  
問うもの—宅地建物取引業者に関する人権問題実態調査  
から考える 奥田均  
ゆっくり考えていきたい「合理的配慮」 24 障害当事者  
による「寸劇」という試み 松波めぐみ  
国際学術大会“衡平運動を再び考える” 2 国際学術会議  
第1部—午前の部 割石忠典  
走りながら考える 177 全国水平社創立100年を展望する  
5 差別撤廃にむけてどのような組織が必要か 北口末広  
**ヒューマンライツ 339** (部落解放・人権研究所刊, 20  
16.6) : 540円  
特集 就職差別を考える—大阪府の公正採用の取り組み  
を中心に  
調査結果からみる部落問題のいま 4 「特別措置法」終  
了後の部落問題に関する差別事件の動向—『全国のあいつ  
つ差別事件』から考える (前編) 本多和明  
追悼 多面的な歴史の見方と、平和・人権・環境を守る  
実践とかかわりを持つことの大切さを教えていただいた  
上田正昭先生のご逝去を悼む 友永健三  
国際学術大会“衡平運動を再び考える” 3 国際学術会議  
第2部—午後の部 (その1) 矢野治世美  
走りながら考える 178 全国水平社創立100年を展望する  
6 差別撤廃にむけて多様な組織の活用を 北口末広  
**ひょうご部落解放 160** (ひょうご部落解放・人権研究  
所刊, 2016.3) : 700円  
特集 日本国憲法70年 憲法は本当に守られているか  
映画の紹介 「袴田巖 夢の間の世の中」 高吉美  
本の紹介  
全国在日外国人教育研究所在日コリアン教材作成チーム  
編刊『サハリンから来た崔アンナ 在サハリンコリアン  
を理解するために』 小西和治／兵庫在日外国人入権協  
会刊『民族差別と排外に抗して 在日韓国・朝鮮人差別  
撤廃運動 1975—2015』 植村満  
**部落解放 725** (解放出版社刊, 2016.5) : 600円  
特集 「部落地名総鑑」の発行・販売を許すな  
ヘイト・スピーチを受けない権利 11 部落差別とヘイト・  
スピーチ 2 前田朗  
私たちは、ここにいる！ 見えない存在になっていた部  
落女性を見える化したNGOブリーフィング 中田理恵子  
目の前に存在する部落出身者 盛況のうちに終えた「BUR  
AKU HERITAGE交流会」 上川多実  
上田正昭先生と人権 安藤仁介  
輝きをます衡平運動の歴史 『朝鮮衡平運動史料集』発

刊とその意義 渡辺俊雄  
回顧 教科書無償運動 18 連載を終えるにあたって 下  
村越良子, 吉田文茂  
**部落解放 726** (解放出版社刊, 2016.6) : 600円  
特集 子どもと創る「学級社会」そのとき教師は  
なぜ差別禁止法が必要なのか 「差別禁止法研究会」部  
落問題班の立法事実調査から 齋藤直子  
ハンセン病家族訴訟について 同じ時代を生きてきた一  
人ひとりに「加害責任」がある 徳田靖之  
「部落地名総鑑」の発行・販売を許さない  
表現の自由よりも人権が尊重される社会に 阪本仁／御  
同朋の社会をめざして 小笠原正仁  
明治政府はアイヌ民族に「土地を与えた」のか 公人や  
公権力によるアイヌ民族差別と歴史修正 多原良子  
**部落解放 727** (解放出版社刊, 2016.7) : 600円  
特集 ジェンダー平等の今  
法期限後の部落問題に対する市民意識 堺市人権意識調  
査2015を中心に 阿久澤麻理子  
障害者差別禁止条例の動向とその意義 金子匡良  
**部落問題研究 216** (部落問題研究所刊, 2016.4) : 1,0  
58円  
滋賀県における人権条例と人権施策基本方針 梅田修  
人権教育研究指定校における人権教育—2013~2014年度  
の場合— 森田満夫  
大教組文書の整理と活用—大教組文書研究会の取り組み  
— 森下徹  
書評 小川政亮著『光りなき者ととも 恠臧・政亮 父  
子二代の記』 野田正人  
**ライツ 204** (鳥取市人権情報センター刊, 2016.5)  
今月のいちおし！ 生田武志著『釜ヶ崎から』 田川朋博  
**リベラシオン 162** (福岡県人権研究所刊, 2016.5) : 1,  
000円  
特集 2015年度啓発担当者のための人権講座  
差別を規制することの意味—国際的な人権状況から—  
内田博文／同和対策審議会答申50年—成果と課題、今後  
の方向を考える 友永健三  
—明治・大正・昭和・平成— 部落問題と新聞報道 長崎  
の場合 阿南重幸  
資料紹介 糟屋地区における水平運動を探る 塚本博和  
図書紹介 永井彰子著『聖人・托鉢修道士・吟遊詩人—  
ヨーロッパに盲人の足跡を辿る—』 崔吉城  
民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 25 村上玄水の  
「解臧文」をどう読むか 石瀧豊美  
指摘をうけて 西田静  
**和歌山研究所通信 52** (和歌山人権研究所刊, 2016.3)  
檜野埼にて—映画「海難1890」にエールを送りつつ気が  
かりなこと— 中森常夫  
歴史的資料における地名・身分呼称の表記のしかたにつ  
いて—中森常夫さんの論考をめぐって— 野口道彦  
「秀吉の根来・雑賀攻め」の地を訪ねて—全国大学同和  
教育研究協議会フィールドワークより 2— 藤里晃

介護における虐待に起因する高齢者の殺人と「介護殺人」の関係 根本治子  
 広島県における「復姓」運動について～忘れ去られた「改姓」の出来事～ 今岡順二  
 セツルメント運動における融和事業との接点をめぐって 一大林宗嗣のセツルメント論を手がかりに― 梅木真寿郎

四代目鶴屋南北が描いた被差別民 太田恭治  
 ハイマートロス つばらつばらにものを思えば 島崎義孝  
 “こころ”と“からだ”に関する仏教社会学的的人権論・序説 八木晃介

我が国における医療保育の必要性 保田恵莉  
**人権と部落問題 885** (部落問題研究所刊, 2016. 5) : 600円

特集 沖縄と憲法  
 文芸の散歩道 清水紫琴作『移民学園』と比べて『破戒』を否定的に見る「受け売り文芸評論」の系譜 桑原律  
 部落問題研究所70年の面影 2 研究所の発足 東上高志

**人権と部落問題 886** (部落問題研究所刊, 2016. 6) : 600円

特集 性的少数者と人権  
 文芸の散歩道 義理と情と誠の証し―井原西鶴『椀久一世の物語』より― 小原亨  
 部落問題研究所70年の面影 3 研究所の成立 東上高志

**人権と部落問題 887** (部落問題研究所刊, 2016. 7) : 600円

特集 戦後部落問題の分岐点 2  
 文芸の散歩道 夏目漱石作『吾輩は猫である』における金田と苦沙弥の対決について 水川隆夫  
 部落問題研究所70年の面影 4 集いし人びと(理事) 東上高志

**じんけんぶんかまちづくり 51号** (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2016. 4)

「全国部落調査」復刻本発行事件を考える 佐佐木寛治  
**季刊人権問題 383** (兵庫人権問題研究所刊, 2016. 4) : 700円

八鹿高校事件の真実を改めて世に問う 20 八鹿高校の民主教育の内実と継承を！～但馬教育研究集会「特別分科会」のとりくみから～ 今井典夫

**振興会通信 127** (同和教育振興会刊, 2016. 3)  
 同朋運動史の窓 33 左右田昌幸

**振興会通信 128** (同和教育振興会刊, 2016. 5)  
 同朋運動史の窓 34 左右田昌幸

**信州農村開発史研究所報 135** (信州農村開発史研究所刊, 2016. 3)

市川五郎兵衛の新田開発―記念碑建立に寄せて― 斎藤洋一

**水平社博物館研究紀要 18** (水平社博物館刊, 2016. 3) : 1,000円

史料紹介 木村京太郎日記 1 奥本武裕  
 婦人水平社と阪本数枝―日記からみえる阪本数枝の水平社運動について― 佐々木健太郎

**地域と人権 1161** (全国地域人権運動総連合刊, 2016. 6) : 148円

「部落差別」永久化法案は廃案に  
**月刊地域と人権 386** (全国地域人権運動総連合刊, 2016. 6)

「部落差別の解消の推進に関する法律案(仮称)」に係わり―憲法改悪を狙う自民党の国民攻略の一環―部落差別永久法 編集部

**月刊地域と人権 387** (全国地域人権運動総連合刊, 2016. 7)

「部落差別の解消の推進に関する法律案」制定に反対する決議 部落問題研究所2016年度定時総会

**であい 649** (全国人権教育研究協議会刊, 2016. 4) : 160円

みんなでつくるみんなの学校 すべての子どもの学習権を保障するために 木村泰子  
 人権問題としての色覚検査考 尾家宏昭  
 二つの全同教研究大会 上田正昭

人権文化を拓く 221 トルコ・シリア国境にて 西谷文和  
**であい 650** (全国人権教育研究協議会刊, 2016. 5) : 160円

みんなでつくるみんなの学校 すべての子どもの学習権を保障するために 2 木村泰子  
 当事者との出会いから～「色覚特性」への無関心と思ひ込み～植野幸子

人権文化を拓く 222 救いと人権 小笠原正仁  
**であい 651** (全国人権教育研究協議会刊, 2016. 6) : 160円

人権文化を拓く 223 子どもの声に耳傾けるまちは「子どもの権利条約」から～子どもが変える・おとなが変わる・しくみは変わる～ 富田稔

**奈良人権部落解放研究所紀要 34号** (奈良人権部落解放研究所刊, 2016. 3) : 1,000円

人権施策を実現させてきた運動の軌跡と今後の課題  
 「同対審」答申から半世紀をふりかえって 寺澤亮一  
 非部落民の部落問題 朝治武  
 赤衣考―被差別民衆史の視点から「教祖伝」を読む― 池田士郎

史料紹介 明治初年奈良油坂町西方寺の墓地拡張 奥本武裕  
 安倍談話と歴史修正主義―清算されない植民地主義と侵略思想― 金井英樹

部落解放同盟奈良県連合会「『両側から超える』部落解放運動をすすめるために」に対する部落解放同盟広島県連合会 政平氏の「考察」についての見解 伊藤満  
 奈良人権部落解放研究所 研究紀要総目次

**ヒューマンライツ 337** (部落解放・人権研究所刊, 2016. 4) : 540円

特集 障害者差別解消法で私たちはどう変わるか  
 国際学術大会“衡平運動を再び考える” 1 衡平運動発祥の地を訪ねて―晋州の現在― 割石忠典  
 差別禁止法を求めます―差別事例の調査から見えてくる

016. 5. 15)

昭和史の中のある半生 47 小森龍邦

**解放新聞広島県版 2208号** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 5. 25)

昭和史の中のある半生 48 小森龍邦

**語る・かたる・トーク 254** (横浜国際人権センター刊, 2016. 4) : 550円シリーズ「解放教育」継承への扉 51 格差を乗り越えるための家庭学習 6 残るW・hともうひとつのW 外川正明  
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う  
「メーテルリンクの『青い鳥』」 吉成タダシ**語る・かたる・トーク 255** (横浜国際人権センター刊, 2016. 5) : 550円シリーズ「解放教育」継承への扉 52 道徳教育と人権教育 1—「道徳科」がいじめを解決するのか— 外川正明  
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う  
「2016年成人式祝辞」 吉成タダシ**語る・かたる・トーク 256** (横浜国際人権センター刊, 2016. 6) : 550円シリーズ「解放教育」継承への扉 53 道徳教育と人権教育 2—国語の授業と道徳の学習— 外川正明  
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う  
「キレイゴトを貫く」 吉成タダシ**カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター  
たより 43** (カトリック大阪教会管区部落差別人権活動  
センター刊, 2016. 4)第8回対話集会 「出・会・い・を・つ・な・げ・て」  
発題者 山本栄子さん**かわとはきもの 175** (東京都立皮革技術センター台東  
支所刊, 2016. 3)

靴の歴史散歩 120 稲川實

近世アジアの皮革 6 日本の皮革貿易 竹之内一昭

皮革関連統計資料

**関西学院大学人権研究 20** (関西学院大学人権教育研  
究室刊, 2016. 3)ドイツでの「人権」理解とその思想史的背景 河村克俊  
ドイツの「反イスラム化愛国者運動」とヘイトスピーチ  
中川慎二

デス・エデュケーションと人権教育 古田晴彦

関学レインボーウィークが提示するLGBT施策のあり方  
小林和香, 飯塚諒, 武田丈, 北山雅博公開シンポジウム「どうして「人権」は権利なのか?—  
グローバル時代におけるHuman Rightsという挑戦—」に  
参加して 阿部潔

難民問題への本学の取り組み—2015年度— 舟木譲

日韓(朝)関係から考える在日朝鮮人の人権—ポストコ  
ロニアルの問いかけ— 李恩子**関西大学人権問題研究室紀要 71** (関西大学人権問題  
研究室刊, 2016. 3)無縁社会における「共苦」(「共悲」)のネットワーク  
について 宮本要太郎

マイナンバー制度のしくみと問題点、拡大する利用の範

囲 松井修視

共同研究「戦争の語りと現代若者の戦争観に関する研究」  
について 酒井千絵戦争の語りと現代若者の戦争観に関する研究 1 家族と  
語る戦争 豊田真穂**京都市地域・多文化交流ネットワークサロン通信  
18** (京都市地域・多文化交流ネットワークサロン刊, 20  
16. 6)『東九条の語り部たち 2—11人の聞き取り報告—』合評  
会の報告 伊藤悦子**グローブ 85** (世界人権問題研究センター刊, 2016. 4)  
京都岡崎にあった悲田院村の絵図 山路興造「朝鮮学校で学ぶ権利」の否定、日本の司法判断は?  
田中宏

今もある産屋の制度 伏見裕子

**藝能史研究 213** (藝能史研究会刊, 2016. 4) : 1, 800円  
上田正昭氏 訃報**佐賀部落解放研究所紀要 33** (佐賀部落解放研究所刊,  
2016. 3)

ネオリベリズム時代の差別解消論 野口道彦

佐賀における貧困、生活困窮対策についての考察: 社  
会的排除とワークフェア 大西祥恵外国にルーツを持つ子どもたちの教育の課題—佐賀県の  
支援の現状から— 松下一世・早瀬郁子

共有・共感を求めて 中山信一

紹介 沖浦和光『部落史の先駆者・高橋貞樹—青春の光  
芒』 黒川伊織**しこく部落史 18** (四国部落史研究協議会刊, 2016. 5) :  
500円

シンポジウム「部落学校について」

「徳島における部落学校」一名西郡石井町高川原A地区  
の場合— 立石恵嗣/高知県における部落学校 山下典昭  
/愛媛の部落学校(分教場) 五藤孝人/香川における  
「部落学校」の状況 山下隆章夏期合宿フィールドワーク報告 テーマ 吉野川中下流域  
の歴史地理的環境 立石恵嗣

同和奉公会高知県本部の活動 吉田文茂

阿波木偶「三番叟まわし」調査事業の成果を教材として  
中内正子道後温泉史に見える被差別民の諸相—「馬湯」「養生湯」  
「薬湯」の秘史— 五藤孝人**社会科学 109** (同志社大学人文科学研究所刊, 2016. 5) :  
1, 000円戦後沖縄の基地と女性—一人の移動とライフヒストリーか  
ら— 桐山節子戦後、集団移住へ向けた河川敷居住者の行政交渉—広島・  
太田川放水路沿いの在日朝鮮人集住地区を事例に— 本  
岡拓哉**人権教育研究 24** (花園大学人権教育研究センター刊,  
2016. 3)狭山事件・請求人の取調べ段階における言い回しの変化  
脇中洋

# 収集逐次刊行物目次 (2016年4月～6月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

**IMADR通信 186** (反差別国際運動刊, 2016. 5) : 500円

特集 人種差別を撤廃する基本法の制定を！  
リパティおおさかの裁判闘争と自主運営に支援を！！  
朝治武

**ウィングスきょうと 133** (京都市男女共同参画推進協会刊, 2016. 4)

図書情報室新刊案内

国本伊代編『ラテンアメリカ 21世紀の社会と女性』/  
松田育子著『読めよ、さらば憂いなし』

**ウィングスきょうと 134** (京都市男女共同参画推進協会刊, 2016. 6)

図書情報室新刊案内

橋木俊詔, 佐伯順子著『愛と経済のバトルロイヤル 経済×文学から格差社会を語る』/宮地尚子著『ははがうまれる』

**鴨東通信 101** (思文閣出版刊, 2016. 4)

比較史に救われ、個別実証に生きる 木下光生

**解放新聞 2758号** (解放新聞社刊, 2016. 4. 11) : 90円  
解放新聞アーカイブズ 60年代の狭山闘争 4

**解放新聞 2759号** (解放新聞社刊, 2016. 4. 18) : 90円  
ノンフィクションからの警鐘 17 三島徳三著『TPPと日本の選択』 音谷健郎

「闇の豊穡」に光をあてる 沖浦和光さんを偲ぶ会

今週の1冊 原ミナ汰・土肥いつき編著『にじ色の本棚』  
解放新聞アーカイブズ 60年代の狭山闘争 5

映画「袴田巖 夢の間の世の中」をみる

**解放新聞 2760号** (解放新聞社刊, 2016. 4. 25) : 90円  
今週の1冊 斎藤貴男著『「マイナンバー」が日本を壊す』  
解放新聞アーカイブズ 60年代の狭山闘争 6

**解放新聞 2761号** (解放新聞社刊, 2016. 5. 2) : 90円  
今週の1冊 村瀬孝生・東田勉著『認知症をつくっているのは誰なのか』

解放新聞アーカイブズ 60年代の狭山闘争 7

**解放新聞 2762号** (解放新聞社刊, 2016. 5. 16) : 90円  
ぶらくを読む 102 関東大震災と朝鮮人・中国人虐殺 湧

水野亮輔

**解放新聞 2763号** (解放新聞社刊, 2016. 5. 23) : 90円  
ノンフィクションからの警鐘 18 吉見俊哉著『「文系学部廃止」の衝撃』 音谷健郎

**解放新聞 2766号** (解放新聞社刊, 2016. 6. 13) : 90円  
水平社博物館所蔵史料が記憶遺産に アジア太平洋地域で日本初の登録

**解放新聞 2767号** (解放新聞社刊, 2016. 6. 20) : 90円  
ノンフィクションからの警鐘 19 S・アレクシエービッチ著『チェルノブイリの祈り』 音谷健郎

上田正昭先生の思い出 秋定嘉和

**解放新聞 2768号** (解放新聞社刊, 2016. 6. 27) : 90円  
写真家 曹智鉉さん死去 70年代の部落を撮る

**解放新聞京都版 1053** (解放新聞社京都支局刊, 2016. 6. 1)

『東九条の語り部たち 2』を読む それぞれが唯一無二の生きざま

**解放新聞東京版 882** (解放新聞社東京支局刊, 2016. 4. 15) : 93円

被差別部落に関わる東日本の古文書研究から 地域から近世部落史の実像を 上 大熊哲雄

**解放新聞東京版 884** (解放新聞社東京支局刊, 2016. 5. 15) : 93円

被差別部落に関わる東日本の古文書研究から 地域から近世部落史の実像を 下 大熊哲雄

**解放新聞広島県版 2204号** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 4. 15)

昭和史の中のある半生 44 小森龍邦

**解放新聞広島県版 2205号** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 4. 25)

昭和史の中のある半生 45 小森龍邦

**解放新聞広島県版 2206号** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 5. 5)

昭和史の中のある半生 46 小森龍邦

**解放新聞広島県版 2207号** (解放新聞社広島支局刊, 2016. 5. 15)

## 事務局よりお知らせ

◇2016年度差別の歴史を考える連続講座の前期3回が無事に終了しました。今年も毎回多くの方々が熱心に聴いてくださり、良い講座になりました。後期は10月から11月にかけて3回開催いたします。ふるってご参加ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://shiryō.suishinkyōkai.jp/>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分